

のその赤い世界は、見るものを引きつけ、そして別世界へと誘うような不思議な魔力を持つているように感じられた。

そんな赤い世界の中、灯里は丘の大樹の下から城ヶ崎村を一望していた。一週間の研修旅行と言う名のホームステイは今日で終わり。明日の朝、灯里たちは城ヶ崎村を離れネオ・ヴェネツィアへ戻る予定になっている。

そういう理由もあり、親しくなった葵にお別れの挨拶をしにきたのだが、今日はどういいうわけかその姿が見えなかった。出会ってからの数日、灯里が訪ねると彼は必ずこの場所にいたので、きっと今日もこの場所にいるだろうと思っていたのだけれど。

灯里の頭上で赤い空が徐々に黒へ変化していく。西の端に顔をのぞかせていた太陽も今ではもうその姿は見えなくなり、かわりに綺麗な満月が東の空にその姿を見せ始めていた。

そうして待つこと数十分、いつの間にか時間は宵の口を過ぎようとしていた。何もせずにのんびり過ごすのが得意な灯里ではあったが、そろそろグランマの家にもどって晩御飯の手伝いをしなければならぬ。

別れの挨拶ができないのは残念だったが、仕方ないので踵を返そうとしたその時、出会った時と同じように唐突に彼女の後ろから男の声が聞こえて来た。

「どこに行くんですか？」

その声は確かにここ数日で聞き慣れた葵の声だったが、どこか違和感があった。

「あ、葵さん」

いつこへ。そう言葉を続けようとした灯里は何故かその言葉を飲みこんでしまった。

「僕はずっといましたよ、この場所に」

灯里が飲み込んだ問いがわかっていたかのように答える葵。そして、灯里は先程感じた違和感の正体を理解した。出会ってからずっと、穏やかな笑みとやさしい口調だった葵。だが、今の彼からはそ

のどちらも消えていた。

「どうかしました？ 灯里さん」

灯里の困惑を見て取ったか葵は小さな笑みを浮かべて見せたが、それはより灯里の違和感を強めただけだった。

「葵さん、ですよね？」

灯里の問いに葵は不思議そうに首を傾げてみせる。灯里には自分の中の違和感をなんと表現していいかわからなかった。一方、葵は元から返事を求めていなかったのか彼女の答えを待たずに、続ける。

「何か用事があったのでは？」

彼の言葉に灯里はようやく自分が彼に別れを告げに来た事を思い出した。いつもと違う葵の雰囲気戸惑いすっかり本題を忘れてしまっていたようだ。

「あ、その、えっとですね、私、明日ネオ・ヴェネツィアに戻るんです。だから最後にお別れの挨拶を、と思って」

灯里の言葉を葵は静かに聞いているようだった。メガネの奥の葵の瞳が灯里をじっと見つめているのを感じる。

「本当は色々話したかったですけど、そろそろ戻らないといけないので失礼しますね。また、いつか会えるといいですね」

さようなら。そう言って踵を返そうとした灯里だったが、自分の身体に降りかかった異変に気付いた。

「あ、あれ？」

彼女の中では回れ右をして坂道を早足で下りていくつもりだったのだが、灯里の足はまるで地面から根が生えたようにピクリとも動かない。

困惑する灯里の様子をみて葵は冷たく言い放った。

「貴女も僕を置いて行くんですね」

それまでとは明らかに異なる冷たい声。それまでの温かみのないだけのものとは一線を画した、明らかに負の意味合いを持つ冷やかな音色。

灯里には彼の言っている意味が解らなかった。彼女はただ彼に別